新潟国際情報大学
情報文化学科

情報文化研究Ⅱ（資料）

1995年10月

情報文化学科発行

氏　　名：會田　彰　（アイダ アキラ）

地　　位：教　授

生年月日：１９２９年８月２９日

学　　歴：京都大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程単位取得退学　（1960年）

研　究　室：３０６号

担当学科目：政治と文化、情報社会論

研究分野：政治文化論、世界システム論、高度情報社会論といった分野であるが、今日の文明史的大転換のときに遭遇し、「日本人の未来学」というべきものの構築の必要を痛感している。それ故、新しいグランド・セオリー（巨大理論）としての「未来学」も含めたい。

主要著作：『N.J.スメルサー 集合行動の理論』　（翻訳）（誠信書房 1973年）
「媒介原理的比較政治文化論」　（『現代社会学』 第4号 1975年）
『転換期の現代社会学』　（編著）（アカデミア出版会 1980年）
「市民性の復権と生涯学習社会への道」
（『法政理論』新潟大学法学会 19巻4号・20巻1号 1987年）
『現代を生きる社会学』　（共著）（ミネルヴァ書房 1991年）
「ポストモダンの政治社会学基礎論について」
（『法政理論』 23巻3・4号 1991年）

所属学会団体：日本社会学会、日本政治学会、環日本海学会

《情報文化研究Ⅱの内容》

自分が生きている時代の難問にチャレンジする。「日本がつくる新文明」の起動に勇んで参画する。そんな志を胸に秘めている諸君の参加を希望しています。演習では一人一人の逞しい想像力を自由に、大胆に発散しあう活発な討論の場を作りたいと思っています。年度末に 400字原稿30～60枚程度のレポートの作成を義務づけます。テーマは各人の自由。ここで選択した課題を卒業時の論文に結び付けるつもりでやって下さい。使用言語は各自のテーマやアプローチによって最適な形を取ってよい。もちろん日本語のみも可。

氏　　名：明石欽司　(ｱｶｼ ｷﾝｼﾞ)

地　　位：講　師

生年月日　：１９５８年１０月２５日

学　　歴：慶応義塾大学大学院法学研究科公法学専攻修士課程修了(1985年)
　　慶応義塾大学大学院法学研究科公法学専攻博士課程中退(1986年)

研　究　室：５０７号

担当学科目：国際社会と法

研究分野：国際法史

主要著作：「ウェストファリア条約の研究」(一)～(六完)
　　『法と行政』（中央学院大学）第３巻第１号以下
　　「ﾊﾞｲﾝｹﾙｽﾌｰｸの jus gentium 理論」
　　『研究報告』（海上保安大学校）第３９巻第１号
　　『海上犯罪の理論と実務』（共著）（中央法規出版　１９９３年）

所属学会
団　　体：日本国際法学会、American Society of International Low

《情報文化研究Ⅱの内容》

本研究は国際法に興味を抱く学生諸君の議論の場にしたい。そのため、毎回のゼミは、各自の問題関心に可能な限り共通するような基本的文献（和文又は英文）を素材とした討論を中心に進められる。

４年次終了の際には、各自の研究テーマに関する論文（400字原稿用紙50枚程度）の提出が義務付けられる。但し、具体的研究テーマは４年次進級の際に明石との個別面談を経て決定することにする。

氏　　名：池田庄治　（イケダ ショウジ）

地　　位：教　授

生年月日：１９２９年５月２４日

学　　歴：明治大学大学院政治経済学研究科経済学専攻博士課程修了（1968年）

研　究　室：３０２号

担当学科目：経済と社会、日本の経済、企業と経営

研究分野：地場産業、地域経済、中小企業
情報化の時代における新しい地域経済、とくに地場産業や中小企業の視点から、２１世紀の新しい経済社会の動向を考察していきたい。

主要著作：『自動車経済政策論』（世界書院　１９６８年）
『経済学要論』（社会科学社　１９６８年）
『新潟県の地場産業』（野島出版　１９７８年）
『新潟県の伝統産業・地場産業』上巻・下巻
（第一法規出版　１９８４年）

所属学会団体：日本経済政策学会、日本中小企業学会

《情報文化研究Ⅱの内容》

新潟県内の主要な地場産業や産地企業及び地域経済における、その史的沿革・現状・課題について、多くの統計資料と実地調査により十分に理解するように指導する。

学生へ一言：新潟県内の経済や産業や企業に対して大いに関心を持つ、まじめな明るい学生がきてくれることを楽しみに待っております。

氏　　名：石川眞澄　（ｲｼｶﾜ ﾏｽﾐ）

地　　位：教　授

生年月日：１９３３年３月２６日

学　　歴：九州工業大学機械工学科卒業　（１９５７年）

研　究　室：６０２号

担当学科目：日本政治史、政治情報、文章表現

研究分野：現代日本政治の動態を分析し、政治過程、政治構造、場合によっては政治思想について考察する。また、選挙分析、選挙制度論にも関心をもつ。日本語の分かりやすく説得力をもつ表現技術についても研究する。

主要著作：『戦後政治構造史』　（日本評論社　１９７８年）
『ある社会主義者－羽生三七の歩いた道－』
（朝日新聞社　１９８２年）
『短い文章のコツ』　（ＫＫベストセラーズ　１９８２年）
『日本政治の透視図』　（現代の理論社　１９８５年）
『戦後政治史』　（岩波新書　１９９５年）

所属学会団体：日本政治学会、日本選挙学会、日本マスコミュニケーション学会

《 情報文化研究Ⅱの内容 》

学生には「卒業研究」の成果として、各自が選んだテーマについて、400字詰め原稿用紙30枚以上100枚以内の論文の提出を求めます。

各自のテーマについて限定はしませんが、テーマの選択に当たっては私に必ず相談することとします。

私は１９６０年代以降の日本政治の現実の動きを間近に観察し、研究してきたジャーナリストです。情報文化研究の過程においても、時々刻々の政治事象について、いろいろな側面からの分析、研究を進めていくことができるでしょう。歴史的な目も必要です。また、それらを伝えるマスメディアについても考えてみましょう。クラス全員の活発な討論を期待します。

氏　　名：市岡政夫　（ｲﾁｵｶ ﾏｻｵ）

地　　位：教　授

生年月日：１９３９年１２月１４日

学　　歴：早稲田大学第一文学部露文専修卒業　（１９６３年）

研 究 室：４０３号

担当学科目：ロシア語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、現代ロシア論

研究分野：環日本海圏におけるロシア極東。ロシア語教授法。
ロシア語を日本人に教えるには、特殊的にどのような点に留意すべきか、ロシア語教授法の研究。又、環日本海圏の一地域でもあるロシア極東の研究。

主要著作：『自治体の国際交流』　（共著）（学陽書房 1984年）
『自治体の国際政策』　（共著）（学陽書房 1988年）
「日本海を囲む輪を」　（『世界』 1991年3月）
「環日本海経済圏の将来像」　（『世界経済評論』 1995年4月）

所属学会団体：ロシア東欧学会、日本ロシア文学会、環日本海学会

《情報文化研究Ⅱの内容》

ロシア極東は、我が国に接近した地域であるにもかかわらず、これまで研究対象として取り上げられることが比較的少なかった地域である。近年、世界各地で構想されている地域経済圏の一つとして環日本海圏が注目されるようになり、極東に関する関心も高まってきた。そこで本ゼミでは、ロシア国内の資料も多用しながらロシア極東に焦点を当てて研究をすすめていきたい。

氏　　名：内山鉄二朗　（ｳﾁﾔﾏ ﾃﾂｼﾞﾛｳ）

地　　位：教　授

生年月日：１９３１年5月２２日

学　　歴：東京都立大学大学院人文科学研究科英文学専攻修士課程修了（1958年）

研 究 室：１６５号

担当学科目：アメリカ文化論１・２

研究分野：１９世紀、２０世紀アメリカ小説、２０世紀アメリカ演劇、
およびアメリカ文化論研究

主要著作：'THE PROBLEM OF THE CENTRAL CHARACTER IN THE AWKWARD AGE'
（『新潟大学人文科学研究』 1967年12月第34輯）
「『アメリカの息子』の問題点ー「出口」を塞いだ黒人のドラマ」
（『新潟大学人文科学研究』 1974年12月第46輯）
『概説アメリカ文学史』（金星堂 1981年）
「「習作」としての『デイジー・ミラー』」
（『新潟大学人文科学研究』 1994年12月第86輯）

所属学会団体：アメリカ学会、日本アメリカ文学会、日本英文学会

《情報文化研究Ⅱの内容》

このクラスでは、アメリカ文化、あるいは文学に強い関心を持っている学生を歓迎したい。

学生はアメリカ社会史、文学史の理解を背景にして、アメリカ文化論の論文や文学作品などを取り上げ、読み、討論し、報告し、まとめ、研究と研究方法の〈面白さ〉と〈きびしさ〉を学ぶ。当然のことながら、必要に応じて英語を使用するので、下手の横好きであっても、英語学習に強い熱意と意欲を持っていることが求められる。

「卒業研究」としては、アメリカ文化、あるいは文学に関するテーマを、それまでの研究を土台にして、各人がそれぞれ任意に選び、レポート（400 字詰原稿用紙40枚程度）にまとめて、提出する。

このクラスに所属した学生が、アメリカ文化のより深い理解を通して、歴史と社会と人間について〈豊な想像力〉と〈飽くなき探究心〉を持った〈私〉を形成してくれることを望みたい。

氏　　名：海野芳郎　（ｳﾝﾉ ﾖｼﾛｳ）

地　　位：教　授

生年月日：１９２８年６月３０日

学　　歴：東京大学文学部西洋史学科卒業　（１９５３年）

研　究　室：４０６号

担当学科目：外交と情報、国際政治論、国際組織

研究分野：従来は、第１次、第２次世界大戦間の、いわゆる「戦間期」を中心とする国際政治史、日本外交史の研究を行ってきた。最近はさらに日本の占領期を中心とする内外の問題、東南アジア諸国の独立問題等も研究の視野に入れている。要するに基本史料が公開される１９７０年代までを関心の範囲としている。

主要著作：『外務省の百年』上巻・下巻
（共著）（外務省百年編纂委員会 1969年）
『国際連盟と日本（近代日本の外交史叢書６）』（原書房 1972年）
『日本外交史１６（海軍軍縮交渉・不戦条約）』
（鹿島平和研究所 1973年）
『佐藤尚武の面目』（共著）（原書房 1981年）
『太平洋・アジア圏の国際経済紛争史』
（共著）（東京大学出版会 1983年）

所属学会団体：日本国際政治学会、日本政治学会

《情報文化研究Ⅱの内容》

まず、国際政治史あるいは外交史の基本史料である外務省史料その他の史料をいかに見るか、その扱い方から入ることとしたい。次いで各種の文献を学習しながら、こうした基本史料を研究にいかに利用していくか。従って学習の範囲は原則として、この種の史料が公開されている19世紀後半あたりから、1970年代までとする。

なお、外国語に自信のある学生には、外国語文献の利用も大いに期待したい。

氏　　名：區　建英　（ｵｳ ｹﾝｴｲ）

地　　位：助教授

生年月日：１９５５年１０月２７日

学　　歴：北京師範大学歴史学系修士課程修了（１９８４年）
東京大学総合文化研究科博士課程修了　（１９９３年）

研　究　室：３０７号

担当学科目：日本の思想、現代中国論、中国文化論、中国語Ⅰ・Ⅱ

研究分野：東アジアの西洋文明理解。百年前から西洋の文明が非西欧の世界へ拡大し始めた時、東アジア諸国はその理解とそれへの対処を迫られ、異文化に対する受容と抵抗、自己再生の壮大なドラマを展開した。そのドラマは今日まで続いている。
私の研究は近代以来の東西文化接触、そして東アジア内の相互の文化接触におけるアジア人民の屈折と成功、悲しみと喜びを辿ることである。

主要著作：「中国における福沢諭吉理解」　（『日本歴史』 1992年2月号）
『日本的市民社会』　（監修）　（新世紀出版社 1992年）
「福沢諭吉研究と丸山眞男」　（『みすず』 1992年10月号）
「励みと悲しみ－近代中国と日本」　（『世界』 1995年3月号）
「近代文明と儒教」　（『近代日本と東アジア』筑摩書房 1995年）

所属学会団体：（日本）中国社会文化学会、アジア政経学会、政治思想学会
（中国）中国日本史学会、中華全国日本哲学研究会

《情報文化研究Ⅱの内容》

中国の事情を知るには、翻訳書や日本語の著書に頼らず、直接中国語の文献を読むのが正しく最も早い道である。このゼミは中国語で中国を研究する学習の場である。オリジナルの中国語文献を、簡単なものから複雑なものへと読んでいき、論文や新聞記事や文学作品など各種の文体に接触し、また社会・民俗・文化など様々な内容をめぐって中国語で語り合い、語学の実践力を高めると同時に、学生諸君がそれぞれの課題を見つけていくように指導する。
ビデオ鑑賞のような勉強も行う予定である。本気で中国を知ろうとし、語学の知識を積極的に生かそうとする学生の参加を期待する。

氏　　名：小澤治子　（ｵｻﾞﾜ ﾊﾙｺ）

地　　位：助教授

生年月日：１９５６年４月２７日

学　　歴：上智大学外国語学部ロシア語学科卒業　（１９７９年）
慶応義塾大学大学院法学研究科政治学専攻
博士課程単位取得満期退学　（１９８６年）

研究室：５０８号

担当学科目：日ロコミュニケーション論１・２

研究分野：主な研究分野は、２０世紀の日ソ・日ロ関係の歴史を東アジアの国際関係の中で考察することである。特に１９１７年のロシア革命、また第２次世界大戦、さらにはペレストロイカからソ連解体にいたる時期に関心をもって研究を進めてきた。

主要著作：『パール・ハーバー５０年：日本・アメリカ・世界』
（共著）（東洋経済新報社 1991年）
「モスクワと極東、アジア・太平洋
ーロシアの対外政策路線の一考察」
（『外交時報』 第1302号 1993年10月）
「ペレストロイカとソ連のアジア・太平洋観」
（『ロシア研究』 第18号 1994年4月）
『アジアの中の日本と中国ー友好と摩擦の現代史』
（共著）（山川出版社 1995年）
『世界の現代史を学ぶ』　（共著）（晃洋書房 1995年）

所属学会・団体：ロシア東欧学会、日本国際政治学会、アジア政経学会
軍事史学会、ロシア史研究会

《情報文化研究Ⅱの内容》

１９９５年は、第２次世界大戦終結後５０年をむかえた年であり、その意味で日本にとっても、世界全体にとっても区切りの年であった。言うまでもなくこの５０年間に世界の中における日本の位置づけや役割は大きく変化した。

この授業では、第２次大戦後の東アジアの国際関係、特に日本、ソ連（ロシア）、中国、朝鮮半島、アメリカを中心とした国際関係について考察するつもりである。まず初めに戦後の東アジアの国際関係を扱った日本語の文献を何冊か読んでこのテーマに対する理解を深めていく。次いで各自に各々の研究テーマについて考えてもらいたい。外国語の使用の有無については、各自の研究テーマの内容によるので、特にそれを義務づけることはしない。

氏　　名：越智敏夫　（ｵﾁ ﾄｼｵ）

地　　位：講　師

生年月日：１９６１年７月７日

学　　歴：慶応義塾大学大学院法学研究科政治学専攻
博士課程単位取得満期退学　（１９９２年）

研 究 室：５０３号

担当学科目：現代アメリカ論

研究分野：現代政治理論の発展と政治文化・市民社会の関連の研究。主にアメリカを中心にした先進諸国における政治学的理念の展開を、現実政治との関係のなかで考察する。

主要著作：「民主主義的統合論と経営管理論の間ー M.P.ﾌｫﾚｯﾄ の政治理論」
（『慶応義塾大学大学院法学研究科論文集』 第29号 1989年）
「政治統合論の一考察ー市民宗教を中心として」
（『慶応義塾大学大学院法学研究科論文集』 第32号 1991年）
「政治文化と市民宗教」　（『立教法学」 第38号 1993年）

所属学会：日本政治学会、日本アメリカ学会
団　　体：American Political Science Association

《情報文化研究Ⅱの内容》

勉強しようが、遊び呆けようが、どのような生活を送ったところで、まともな人間ならば絶対後悔するのが大学生活である。また、Curiosity killed the cat.というのも所詮ことわざであって、どんなに好奇心を持ちすぎても（おそらくは）死ぬことはない。そこで当セミナーには、獣のような知的好奇心と問題関心をもつ学生の参加を希望する。基本的には邦文テキストの講読というかたちをとる予定。活発な議論の場としたい。

今年度のテーマは「政治の現場と政治学的認識」である。国内国外を問わず、現代の政治社会の問題点をどのように見つめ、その視点をどう構築するか。永田町以外の様々な「政治の現場」からどのような問題を抽出するか。その知的方法を手にしてもらいたい。

氏　　名：金　己大　(ｷﾑ ｷﾃﾞ)　KIM KI-DAE

地　　位：教　授

生年月日：１９２９年２月２０日

学　　歴：京都大学経済学部卒業　（１９５４年）
東京大学大学院農業経済学科博士課程修了　（１９６４年）

研　究　室：１６８号

担当学科目：現代朝鮮論

研究分野：現代朝鮮半島（大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国）の社会を政治と経済を中心に、大戦後の新生独立諸国のなかに置いて、ＮＩＥＳ、社会主義（中国、ベトナム）との比較の視点から考察、研究している。

主要著作：「朝鮮半島・脱冷戦社会への道」　（『世界』 1990年12月）
「転換期韓国の市民社会」　（『私学公論』 1993年10月）
「岐路に立つ朝鮮民主主義人民共和国」
（『新局面を迎えた東北アジアと経済圏形成の可能性に関する調査研究』（財）産業研究所 1994年6月）
「朝鮮民主主義人民共和国、冷戦後への課題と対外経済事業」
（『日本型経済発展の転換と東アジアに関する調査研究』（財）産業研究所 1995年6月）

所属学会団体：比較経済体制学会、環日本海学会、東アジア経済経営学会

《情報文化研究Ⅱの内容》

１．学生は授業を通じて、自分の卒業論文のテーマを考え、準備し、報告討論する。
２．クラスの共通テーマは、朝鮮半島南北社会の過去、現在、展望、問題点などを客観的に把握し、評論、判断することである。そのさい必要なアプローチの仕方、時代的な問題、世界史の流れ、背景にある政治、経済、文化の内外の枠組について基本的な文献を研究し、討論する。テキストはその都度指定する。
３．コリア語の文献も一部活用する。

氏　　名：佐藤　晟　（サトウ アキラ）

地　　位：教　授

生年月日：１９３０年１１月２０日

学　　歴：東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程終了　(1957年)

研　究　室：５０５号

担当学科目：英語１・２・３、近代化論

研究分野：前任地の大学では英米文学を専攻し、アメリカの小説が研究範囲であった。研究対象として19世紀のピューリタン作家 Nathaniel Hawthorne、Herman Melville、20世紀前半の自然主義作家 Theodore Dreiser, 「ジャズ時代」の代表作家 F.S.Fitzgerald 等の名前が挙げられる。このほか19世紀ヨーロッパの文芸にもいささか関心があり、最近では日本の近代文学を耽読している。

主要著作：「The Marble Faun 小考」　(『新潟大学人文科学研究』 1975年)
「Herman Melville の "Bartleby, the Scrivener" について」
(『新潟大学人文科学研究』 1979年)
「T.Dreiser の An American Tragedyを読む」
(『新潟大学人文科学研究』 1988年)

所属学会：新潟大学英文学会、日本英文学会
団　　体：日本ナサニエル・ホーソーン協会

《情報文化研究Ⅱの内容》

文芸を視点とした日本近代化論。日本は伝統的に「外圧国家」であるとみなされている。古代の日本国家形成に関する論議は歴史家に一任するとしても、明治以降の文明開化が外圧によるものであるという点は、異論のないところであろう。この授業では、日本の文明開化について文芸の観点から考察してみる。それがために森鴎外と夏目漱石の両作家をとりあげる。明治以後の日本文壇を植民地文学・猿真似文学と擯斥する向がある。上記の両作家は和・漢・洋の学殖において後世の文人たちに冠絶するものがあったと言うが、彼等の思想・文学も又同時代の作家同様模倣・猿真似にとどまるものであったか否か？すくなくともはっきり言えることは、和・漢の教養豊な両者の小説・評論が西洋の文化・思想に対する異常なまでの関心、複雑な葛藤を正直に表現していることである。文芸は世情を敏感にうつす鏡であるとすれば、学殖・感性ともにすぐれて豊かな両作家の足跡を辿ることは意義あることと思う。

テキストには教養小説（ビルドウングスロマン）２品。『三四郎』（夏目漱石）、『青年』（森鴎外）を使ってみたい。学生諸君にはじっくり原作を読んだ上で、感想を率直に発表してもらう。

氏　　名：蔡　建国　（ｻｲ ｹﾝｺｸ）

地　　位：助教授

生年月日：１９５３年１０月１１日

学　　歴：ドイツ・Humboldt University 哲学博士(歴史学)学位取得（1990年）

研 究 室：６０８号

担当学科目：中国語Ⅱ・Ⅲ、日中コミュニケーション論

研究分野：中国近代思想史、近代日中関係史。
「西洋の衝撃」をめぐる中国思想文化発展の歴史構造を再考察する一方、今日中国社会に貫通している諸問題の中に現れた歴史的特質及び共通問題の諸相を再検討する。また、それに関連して近代以来見ることのできる相互依存、競存、対立する日中関係の中で、近代日中文化の相違点を踏まえ、両国民の相互認識の態様を考えている。

主要著作：『蔡元培先生記念集』史料集　（北京・中華書局　1984年）
『蔡元培画伝』人物伝記　（上海人民美術出版社　1988年）
「近代中国知識人の日本文明理解の態様」
（『近代中国研究彙報』第15号 東洋文庫 1993年）
「「西洋の衝撃」をめぐる中国思想文化発展の歴史構造」
（『史滴』第15号 早稲田大学 1994年）
「近代中国知識分子的理性探索」
（『孫中山研究論文集』第12号 1995年5月 中国 中山大学学報(紀要)）
「「知日」の視点が必要」　（『新潟日報』 1995年8月30日）

所属学会団体：アジア政経学会、東方学会、中国社会科学研究会代表

《情報文化学科Ⅱの内容》

近代以来の中国における伝統と近代化の葛藤の中に現れた思想文化上の変容、日中両国国家関係及び国民の相互認識を理解することを目的とする。全体のテーマは、「近代中国に対する私の認識」及び「２１世紀日中関係の中の私」とし、必要な文献を読み進める。ゼミの参加者には中国語辞書を持参するとともに、感想を述べることを義務づける。

中国文化と語学の習得意欲ある学生の参加を歓迎する。ゼミの方針として、中国文化と日中関係に関する映画、文学作品、その他の資料を活用し、学生諸君の「知中」の視点を養えるように、楽しい雰囲気の中で授業を行いたい。

氏　　名：澤口晋一　(ｻﾜｸﾞﾁ ｼﾝｲﾁ)

地　　位：講　師

生年月日：１９５９年２月１０日

学　　歴：明治大学大学院文学研究科地理学専攻博士課程満期退学（１９９２年）

研 究 室：４０９号

担当学科目：環境情報

研究分野：高緯度極地と中緯度高山山地における地形プロセスの比較研究。
氷期から後氷期にかけての環境変化を、氷河・周氷河地形から明らかにすること。

主要著作：「北上山地山稜部の荒廃裸地における
凍結融解による斜面物資移動」
（『地理学評論』 60-12. 1987年）
「人為がまねいた氷期の景観」　（『科学』 58-9. 1988年）
「北上川上流域における最終氷期後半の化石周氷河現象」
（『季刊地理学』 44-1. 1992年）
「ｽﾋﾟｯﾂﾍﾞﾙｹﾞﾝとわが国の高山山地における斜面物質移動」
（『地理学評論』 65-2. 1992年）
『山の自然学入門』　（共著）（古今書院 1992年）

所属学会団体：日本地理学会、日本第四紀学会、東北地理学会

《 情報文化研究Ⅱの内容 》

地球の自然環境の生い立ちを総合的に扱う研究領域の中心をなすのが「第四紀学」、「自然地理学」と呼ばれる分野である。これは広い意味で、いわゆる「地学」と考えてもらった方がよく、したがって研究の場合も野外にあることが圧倒的に多い。３年次には現在の自然環境がどのような過程を経て成立したのかを、新潟という地を出発点として、次第に地球規模の視点に広げて考察する。

卒業研究は地域研究を主体にしたいと考えている。たとえば、「越後平野の地形発達史」とか「新潟県における積雪分布」、あるいは「八海山における植生帯の垂直分布」といったタイトルに興味を感ずるようであれば文句なくドアをたたいて欲しい。いずれにせよ、自然環境にかかわる諸事項に興味のある学生を望む。

なお、卒業研究は各自のテーマに関するレポート（400字原稿用紙40～50枚程度）作成に重点が置かれる。

氏　　名：品川　徹　（シナガワ トオル）

地　　位：講　師

生年月日：１９５０年７月７日

学　　歴：東京都立大学大学院社会科学研究科政治学専攻
博士課程単位取得満期退学　（１９８４年）

研 究 室：６０１号

担当学科目：現代ヨーロッパ論

研究分野：近現代フランス政治史。政治を歴史的経過において考察する。現代の日本社会でも大きな問題となっている「自由」とあらたな秩序の形成という政治課題を、より長い時間のなかで、そして異なる地域の経験を比較しながら検討している。フランスの自由主義、共和主義、社会（民主）主義が、何を理念として掲げ、どういう必要（特に自発的な）を力として、現実の中で動いていったかを（失敗や欠落もふくめ）追求している。

主要著作：「レオン・ブルムと『不干渉政策』の決定」
（『東京都立大学法学会雑誌』 第25巻1号 1984年）
『スペイン内戦と国際政治』　（共著）（彩流社 1990年）
「いま、リベラルを問い返す」　（『私学公論』 1993年）

所属学会団体：日本政治学会

《情報文化研究Ⅱの内容》

「魅力的な人間」は、何を生きる力の源泉とし、どういう環境のなかで、その力を、どんな努力を通して、発揮していったのだろうか。この問いを中心にしたい。ある個人の（もしくは集団の）歴史を時代の中でたどることで、ゼミ参加者の一人一人が、自身の研究と社会生活の参照軸を得てほしい。時代は２０世紀、地域は特定しない。取り上げる人物の有名無名は問わない。ゼミ開始のときに誰を自分の研究テーマとするか決めてなくても良い。

年度の前半ではたくさん読み、参加者全員で議論して、各自のイメージを固めていきたい。後半では、それぞれのテーマに則して資料を集め、参考文献を読んでもらう。作業の進行状況、中間考察を適当なときに発表して、全員の意見を得ていくことにする。四年次の夏にはレポートの初稿がかけるようにしていきたい。お互いの知識をだしあい、感性の違いを生かして、ひとりひとりが、より高次元の判断力を見につける場にしたいと思う。

氏　　名：高瀬昭治　（タカセ ショウジ）

地　　位：教　授

生年月日：１９２９年１０月２５日

学　　歴：東京大学文学部美学・美術史学科卒業　（１９５３年）
東京大学大学院人文科学研究科美学専攻修士課程中退（１９５４年）

研　究　室：３０４号

担当学科目：コミュニケーション論、情報メディア論、国際関係論、平和学

研究分野：コミュニケーション論と国際関係論の２つの分野に大別される。前者では、コミュニケーションの基本構造の分析をテコに、情報文化社会の特質の解明を目指す。後者では、冷戦後の国際社会の分析を通じて、軍事力に頼らない形で、構造的な暴力をなくす方策を探る。

主要著作：『安全保障とは何か』（朝日新聞社 1967年）
『交渉力の研究』（学陽書房 1981年）
「平和と安全保障への日本の貢献」
（『１９９０年代日本の課題』 三省堂 1987年）
「生命科学の光と陰」
（四国地区大学放送公開講座『未来を開く生命科学』 1990年）
「コミュニケーション過程におけるディスコミュニケーションの契機について－Ｗ・モラエスの場合」
（『徳島大学総合科学部紀要』 1993年）

所属学会団体：日本マス・コミュニケーション学会、日本平和学会

《情報文化研究Ⅱの内容》

マルチメディア社会における文化のあり方を、学生とともに考える。入り口として、まず西垣通『マルチメディア』を読み、この新しいメディアの特徴を学ぶ。次にW・J・オング『声の文化と文字の文化』で、人類のコミュニケーション手段の歴史と、それぞれの文化類型の違いを理解する。最後に、関連する英文論文を輪読する。

このゼミの大きな目標は、マルチメディアをめぐる技術的・工学的研究ではなく、マルチメディア社会と人間との関係、そこから生まれるであろう新しい情報文化の特質を理解することにある。明確な解答がまだ見えない新たな研究領域だけに、課題図書を熟読し、知的好奇心の翼を広げて、自分の頭で考える習慣をつけねばならない。このテーマに、あえて挑戦しようという諸君の参加を待っている。

氏　　名：高橋正樹　（ﾀｶﾊｼ ﾏｻｷ）

地　　位：講　師

生年月日：１９５６年3月1日

学　　歴：中央大学大学院法学研究科政治学専攻博士課程満期退学　（１９８９年）

研 究 室：６０９号

担当学科目：現代東南アジア論

研究分野：政治学の観点からタイを中心にした東南アジア研究をしていますが、日本と東南アジアにも関心があります。

主要著作：「19世紀前半におけるﾊﾞﾝｺｸ王朝の政治秩序ー交易港と権威交易体制ー」
『法学新報』　中央大学法学会　第96巻1・2号（1989年11月）
「政治と地域研究」　『私学公論』　（1991年7・8月合併号）
「ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ紛争とﾀｲ外交（1978-82年）ー東南ｱｼﾞｱ国際関係と前線国家外交ー」
『中央大学企業研究所年報』　第14号（Ⅱ）（1993年7月）
「ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ紛争とﾀｲ共産党の崩壊ー東南ｱｼﾞｱ地域国際ｼｽﾃﾑとﾀｲ国家ー」
『中央大学社会科学研究所共同研究報告書』（近刊予定）

所属学会団体：日本国際政治学会、東南アジア史学会

《情報文化研究Ⅱの内容》

このゼミの目的は、第一に、東南アジアおよび東アジア研究を通じて、私たちが国境を越えた地球市民として生きる可能性を探ることです。その際、歴史を正しく認識しその過ちから未来を志向するという意味で、日本の戦前の帝国主義の批判的検討も行います。日本の過去に対する厳しい学問的態度を皆さんに求めますが、それがアジアの隣人の信頼を獲得し、独善的でない未来像を考える最低条件だからです。第二に、授業全体を通じて、論理的かつ批判的に「読む・書く・聞く・話す」の訓練を行います。

私自身はタイ研究が専門ですが、授業の内容や「卒業研究」テーマはそれに限定しません。広く東南アジア（東アジア）と日本に関するものを学生と相談の上で決めます。通常のクラスでは、英語の文献も読みこなせることが求められます。他のゼミと同じように、このゼミもいいかげんな気持ではできませんが、アジア研究を通じて何か考えてみたいという気持があれば大歓迎です。

氏　　名：原口武彦　（ﾊﾗｸﾞﾁ ﾀｹﾋｺ）

地　　位：教　授

生年月日：１９３４年１０月１０日

学　　歴：早稲田大学大学院経済学研究科経済学専攻修士課程修了（１９６２年）

研　究　室：１６７号

担当学科目：国際地域論、情報化と発展途上国

研究分野：仏語圏西アフリカ諸国の態様を素材として、現代世界における国家と族的集団（部族、民族）との関係を考察する。

主要著作：『部族ーその意味とコートジボワールの現実ー』
（アジア経済研究所　１９７５年）
『アビジャン日誌ー西アフリカとの対話ー』
（アジア経済研究所　１９８５年）
「私の地域研究観」『私学公論』　（１９９１年７・８月合併号）

所属学会団体：日本アフリカ学会

《 情報文化研究Ⅱの内容 》

このクラスに所属する学生には「卒業研究」の成果として、各自が選んだテーマに関するレポート（４００字原稿用紙３０~４０枚）の提出を義務づける。

私自身は過去３０年、仏語圏西アフリカを対象に「地域研究」に従事してきた。そこで発見したテーマは、現代世界の領域国家と、その枠組の中で生活するさまざまな人種、民族、部族との関係にまつわる諸問題であり、現在もそのような問題に関心をもちつづけている。

各自のテーマについては、私の側からとくに限定しないが、このクラスを選択するときにこのことは考慮に値する点であろう。

このクラスの全体的なテーマとしては、はなはだ抽象的であるが、「現代世界における『私』の発見」とし、その手段として毎回一つのテーマにもとづく全員参加の討論を重視する。

氏　　名：広瀬貞三　（ヒロセ テイゾウ）

地　　位：講　師

生年月日：１９５６年1月2日

学　　歴：早稲田大学第二文学部東洋文化科卒業（１９７９年）
韓国高麗大学大学院史学科韓国史専攻修士課程修了（１９８４年）

研　究　室：５０６号

担当学科目：コリア語Ⅰ、朝鮮文化論、日朝コミュニケーション論

研究分野：朝鮮近代史。時期は、開港（1876年）から解放（1945年）まで。この間の朝鮮社会の急速な変貌と、植民地支配政策との関連に関心を持つ。現在は道路、発電所など産業基盤の整備をめぐる諸問題を中心に研究を進めている。

主要著作：「19世紀末日本の朝鮮鉱山利権獲得」『朝鮮史研究会論文集』22号（1985年）
「李容翊の政治活動（1904～1907）」『朝鮮史研究会論文集』25号（1988年）
『産業の昭和社会史⑫土木』　（共著）（日本経済評論社 1993年）
「日韓会談に臨む日本の韓国観」　『近現代史講座』6号（1995年）（韓国）
「植民地期朝鮮における官斡旋土建労働者」　『朝鮮学報』155号（1995年）

所属学会団体：朝鮮史研究会、朝鮮学会、日本植民地研究会

《情報文化研究Ⅱの内容》

「朝鮮近代史への新たな認識」をテーマとし、学生が自らの朝鮮史認識を深めることを目的とする。

これまで朝鮮近代史は「抵抗と抑圧の時期」としてとらえるのが通説であった。しかし、韓国が戦後植民地から資本主義化に成功したことで、解放前後の「連続と断絶」が新たな研究課題として浮上して来た。朝鮮近代史への認識は、大きな転換期に入ったといえよう。

ゼミではまず研究史上の争点を講義した後、史料や関連論文を配布し、全員で講読をおこなう。その後、各自が関心あるテーマを設定し、調査結果を報告し、議論によってその内容を深めていく。これによって、４年次の「卒業研究」につなげる。

コリア語の文献を読むことがあるので、コリア語を履修していない学生は事前に独習しておくこと。